



発掘された福井城

福井城下の茶の湯の器

●会場 松平家史料展示室

●会期 平成18年11月8日(水)～平成19年1月28日(日)

近年のJR線の高架化や福井駅の新築、福井駅周辺の再開発事業に伴う発掘調査等により、在りし日の福井城の生活文化が徐々に窺われるようになってきました。今回の展示では、福井城下で使われていた茶の湯の器を中心に展示します。武家屋敷跡から出土した美濃、唐津などの桃山の茶陶、初期伊万里の食器など、逸品ばかりを集めました。在りし日の福井城の文化に思いを馳せながらご覧いただければ幸いです。

茶道史と考古学

茶道は中世から近世へと至る時代の転換期に大きなインパクトを与えました。茶道一茶の湯は、お茶を飲むという行為と水墨画に代表されるような枯れた世界観とを融合し、独特の思想・美意識を作り上げました。

従来の貴族・武士階級は平安時代以来の「王朝文化」を精神基盤としていました。それに対し新しく台頭してきた商人や戦場を勝ち上がってきた新興武士たちは新しい精神基盤を「茶の湯」や「能」に求めました。茶の湯の興隆はこのような新興勢力による「文化革命」と位置づけることもできるでしょう。豊臣秀吉が宮中茶会で天皇に茶を献じた行為は、「王朝文化」の頂点に新興文化を認めさせた画期的な出来事と位置づけられます。

さて、茶の湯は飲料として単に抹茶を飲むことだけが目的ではなく、独自の世界観を形成するため茶の湯専用の建物＝数寄屋、専用の庭＝露地、お茶専用の食器類・独特の食事＝懐石料理を創造し、あらゆる分野に影響を与えました。中近世の歴史を文化的側面から捉える場合避けて通れないのが茶道史といえます。一乗谷朝倉氏遺跡の発掘からはじまった中近世の考古学は、近年めざましく研究の進んだ分野です。このような考古学の中でも茶の湯を正面から取り上げ、茶道史に新たな視点を与え、成果を上げつつあります。

桃山から江戸時代の城下町などの都市遺跡を発掘すると必ず茶道具が出土します。そこにはどのような意味があるのでしょうか。豊臣家や徳川家は「茶の湯」を武士の儀礼・嗜みとして重視しました。すると大名達もそれに従い、さらにその家来達も遅れまいとした結果、茶の湯文化は短期間で全国に広がりました。出土品からは、京・大坂より発達された文化がどのように地方都市へ普及していったかを知ることができます。

また茶人の増加は茶道具の需要増加に繋がります。窯業産地ではこの需要に応えるべく魅力的なモデルを次々と発表し、量産体制を確立しました。モデルチェンジの早さは遺跡の詳細な時期設定を可能にします。また量産化は、やきものを全国へ同時に行き渡らせ、全国の遺跡同士での比較や情報共有が可能です。このように茶道の普及は中近世考古学を研究する上で重要な資料性を内包しています。

国内有数の都市であった北庄、そして福井城。今回の展示では、その歴史と繁栄の有様を考える資料として、茶の湯の器を取り上げます。実際に福井藩の武士が愛用した「うつわ」を通じて、彼らとの語らいを楽しんでいただければと思います。

茶の湯とうつわ

茶の湯は、日本の陶芸に多彩で独特な発展をもたらした最大の原因といっても過言ではないでしょう。茶の湯が広まりだした室町時代、最高級道具といえば唐物＝中国製品でした。しかし唐物は貴重品であったため、廉価版としてコピー商品をつくりました。製造したのは尾張瀬戸の職人たち。しかし唐物のより精巧なコピーを求めた結果、非常に高い技術を習得するに至りました。実はこの時代に培われた高い技術力が、次の独創的な桃山茶陶誕生を支える母体となりました。

茶碗はお茶を飲む実用品にすぎません。ところが桃山という時代の気風は、茶碗に可能な限りのオブジェ的視覚性をもたせ、茶人の個性や時代のエネルギーを爆発させました。この茶人たちの既成概念に囚われないエネルギー的な要求に、陶工達は高い技術力と時代を読むセンスで見事に答えました。それが日本陶芸史上燦然と輝く桃山茶陶です。わざとロクロを使わず手ひねりにアンバランスさを求めた楽茶碗、グニャリと曲がった沓茶碗、見事な造形美と絵画デザインが融合した志野、織部や唐津の向付。しかも美濃や唐津の窯元では量産化できる体制を作ったことも茶の湯文化が広く行きわたる要因となりました。ところで茶人の要求は国内の窯業産地にのみ求められたのではなく、中国や朝鮮半島にまで桃山デザインの特別注文をおこないました。また豊臣秀吉の2度にわたる朝鮮出兵では、多くの朝鮮人陶工を連れ帰りました。これが新しい技術を日本にもたらす結果となり、窯業技術を向上させました。現在有名な萩焼・薩摩焼はこのとき作られた窯場であり、唐津では画期的な技術革新を主導し、さらに伊万里焼と呼ばれる日本初の磁器製造に関わったのも彼ら朝鮮人陶工といわれています。

茶の湯の器の二大産地～美濃と肥前～

美濃のやきもの

美濃焼は、今から400年程前の桃山時代に、現在の岐阜県東濃地方で隆盛したやきものです。山一つ隔てた隣接地域に、やきものの代名詞である愛知県の瀬戸があり、近年まで美濃焼は瀬戸焼と混同して捉えられてきました。「瀬戸黒」や「黄瀬戸」は美濃で焼かれた器ですが、このような理由で「瀬戸」という名が使われています。美濃焼では「瀬戸黒」「黄瀬戸」「志野」「織部」といった特色あるやきものが作られました。いずれもそれまでの日本のやきものにはない色彩感覚や造形美を備えており、新しい茶の湯の器として大いにもてはやされました。

「志野」

志野は鉄泥で絵を描いた上に、長石釉を掛けて焼き上げたやきものです。志野ならではの白く柔らかな肌、釉の濃淡によって生じるほのかな赤色が見どころとなっています。



志野茶碗

「織部」

織部は銅緑釉の緑色が目に鮮やかなやきものです。その独特のゆがみの造形やデザインは現代にも通用するようなインパクトを持っています。



主な茶陶の産地と港、消費地

肥前のやきもの

肥前のやきものといえば「唐津」と「伊万里」の名が浮かびます。江戸時代より陶器を「唐津」、磁器を「伊万里」と呼んでいます。これらの呼称はやきものを積み出す港の名前からつけられたもので、産地をあらわしているわけではありません。実際の生産地は、陶器は佐賀県武雄市、磁器は佐賀県有田町を中心に、佐賀県西部から長崎県の一部にまたがる地域に広がっていました。

「唐津」(肥前陶器)

唐津焼は朝鮮半島のやきものの技術を導入して天正年間(1573～91)に開窯したと考えられています。桃山時代には朝鮮製の高麗茶碗の写しや美濃焼の影響を受けた「絵唐津」の向付などに名品が生まれ、茶の器、懐石の器として人気を博しました。その後、江戸時代になると茶陶生産からは撤退し、庶民向けの甕や鉢が主力製品となっていきました。

「伊万里」(肥前磁器)

日本における磁器の生産は、江戸時代初頭、1610年代ごろに肥前国で始まりました。磁器焼成の技術も陶器と同じように朝鮮半島に由来するもので、伝説では朝鮮人の陶工李参平が創始したとされます。肥前磁器は次第に生産体制や技術の改良を行っていき、国内においては美濃や唐津の陶器に替わって全国に流通し、海外においては内乱中の中国磁器の代替品としてヨーロッパに盛んに輸出されるようになりました。この輸出時代に入る前、技術革新の前の1640年代までの肥前磁器のことを「初期伊万里」と呼んでいます。その後の伊万里にはない素朴で躍動感あふれる装飾の器は高く評価されています。



伊万里皿

今回の展示にあたっては、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの御協力を賜りました。また企画、解説、展示演出に関しては、同センター文化財調査員の河村健史氏に御助言、御助力を賜りました。

◎見どころ講座

「福井城跡の発掘成果」

日時 11月19日(日)午後2時～

場所 2階講堂

講師 河村健史(福井県埋蔵文化財調査センター)

定員 60人(当日先着順)

【次回の展示】

春嶽公記念文庫の和歌短冊

平成19年2月1日(木)～3月21日(水)

「展示解説シート No.23」

平成18年11月8日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1

電話(0776)21-0489 FAX(0776)21-1489

担当: 藤川 明宏